

次はあなたが、行ってみませんか？

(独)放射線医学総合研究所重粒子医科学センター 横岡 由姫

1. 参加の目的

「海外の医療機関はどんなにすごいのか、広い世界を見てみたい、英語が上手になりたい」という多くの方々が抱く思いを、私も以前から持っていた。日常生活では、世界を肌で感じる機会や英語を話す経験は少なく、日本と米国における研究や業務環境の相違を理解することが難しい。そこで、煮詰まり気味の自分の中に何か新しいアイデアが生まれるきっかけになるのではないかと、自分の専門分野から臨床現場に対して役に立てることが知りたい！と考え、今回の平成 24 年度スタンフォード大学研修に参加させていただいた。

2. 目指すべき学会のあり方と国際化

夜は講師を招き、米国での業務経験・暮らしについて全員で聴講したり、テーマについて議論したりした。「目指すべき学会のあり方と国際化について」では、学術大会への英語による抄録投稿や国際セッションの増加などが提案された。また、意欲ある会員のために海外研修や国際学会参加の機会を提供するなどの整備がなければ、国際化(国際化を海外に行く事、英語でプレゼンや論文を書く事と定義するならば)は進まないのでは？など、具体的な意見が次から次へと飛び出し、参加者全員のモチベーションの高さを実感する時間であった。英語を上手く使いこなし自分の研究をアピールしたい！と思っているが、壁は高くてなかなか越えられない。どうして良いのか解らない。そういった会員を導く事が出来るような制度が充実した学会であれば良いのではないかと考えている。

3. 研修で得たことを今後どのように活かすか

現在の私の業務は病院情報システムの管理・運営であり、研究テーマは技師の撮影プロセスをタスク分析や Ontology 工学を用いて可視化するなどの医療情報分野が専門である。研修内容は、MRI や CT や PET などの最新の撮影技術を学ぶ事が主であったが、病院や 3D Lab の見学を通して、撮影業務と技師の関係性が日本と米国の間で大きく違う事を学ぶことが出来た。例えば、日本では 1 人の技師が撮影から撮影後の画像処理を行い、並行して複数のシステムを利用し、他職種との連携を取りながら業務を進める。また、技師同士が個々に様々なモダリティを経験し互いに知識の輪を作っているのに対して、米国では CT 撮影技師や MRI 撮影技師などモダリティごとに細分化し専門性を高めるスタイルであった。このような相違は、システム構築や情報システム-技師の関係にどう影響しているのかなど、非常に興味深かった。これらの研修で得た疑問や興味をヒントとして研究を深め、学会での発表や論文の投稿を積極的に行なって行きたい。

4. 謝辞

最後に、引率者として私達を導いて下さった金沢大学の田中先生、受け入れて頂いた Stanford 大学の皆様、GEHC-J スタッフの皆様、参加の後押しをして下さった当室長の奥田保男先生と同僚の皆様に深く感謝致します。そして、本研修で出会えたスタンフォード大学研修 7 期生の皆様に感謝致します。



金沢大学の田中先生(左),GE 田頭さん(右)とランチで